

## 武蔵野日曜聖書講筵

カナンの女 ―小池光子23周年記念―

## ―マタイ伝第15章21～28節―

1980年1月20日

小池辰雄

主よ、我を助けたまえ ひとむきの信 「精神一到、何事か成らざらん」 兄貴の政美 藤井武  
先生 弔い合戦 「天なる母よ」 自分を投げ入れる 「勝利者の墓」 自分を問題にするな 天  
下二品

## 【マタイ15】

21 イエスここを去りてツロとシドンとの地方に往き給う。22 視よ、カナンの女、  
その辺ほとりより出できたり、叫びて『主よ、ダビデの子よ、我を憫あわれみ給え、わが娘、  
悪鬼あくまにつかれて甚いたく苦しむ』と言う。23 されどイエス一言も答え給わず。弟  
子たち来り請こいて言う『女を帰したまえ、我らの後より叫ぶなり』24 答えて  
言いたもう『我はイスラエルの家の失せたる羊のほかしかわに遣されず』25 女きた  
り拜まがりて言う『主よ、我を助けたまえ』26 答えて言いたもう『子供のパンを  
とりて、小狗いぬに投げ与たまうるは善からず』27 女いう『然り、主よ、小狗も主人  
の食卓たべくすよりおつる食屑くずを食くらうなり』28 ここにイエス答えて言いたもう『おん  
なよ、汝の信仰まことは大なるかな、願ねがいのごとく汝になれ』娘この時より癒えたり。

## ●主よ、我を助けたまえ

今日は母（小池光子 1869年11月9日～1957年1月19日 享年88歳）の23周年記念に因  
んで、「カナンの女」と題しました。マタイ伝15章21から28節までです。

21 イエスここを去りてツロとシドンとの地方に往き給う。

「ここ」というのはカペルナウムです。ガリラヤ湖の北の方です。

22 視よ、カナンの女、

「カナンの女」というのは――カナン地方は非常に大きな地方ですけれども――特にフェニ  
キア系系の女です。他民族、異邦人です。

その辺ほとりより出できたり、叫びて『主よ、ダビデの子よ、

女の人おんながこういうように叫ぶというのは、普通のことではないので、よほどのことなんです。  
「ダビデの子よ」というのは、「メシヤ」「救主すくぬし」という気持をもった言葉です。

我を憫あわれみ給え、わが娘、悪鬼あくまにつかれて甚いたく苦しむ』と言う。



「わが娘」というのは、稚いとけなき子どもで、小さい子です。

<sup>23</sup>されどイエス一言も答え給わず。弟子たち来り請こいて言う『女を帰したまえ、  
我らの後より叫ぶなり』

「うるさいから、もうこれは帰してしまつてください」と。

<sup>24</sup>答えて言いたもう『我はイスラエルの家の失せたる羊のほかに遣つかされず』  
キリストも、弟子と同じような立場で、

「イスラエルの同族の者には自分はするけれども、異邦の者には別に関係ないんだ」というようなことを、

「我はイスラエルの家の失せたる羊のほかに遣つかされず」

と、だいたいキリストの言葉とは思えないようなことを言われる。むしろ、キリストの言葉と思えないから、実は本当の意味でキリストの言葉ということが分かるわけですが。

<sup>25</sup>女きたり拝して言う『主よ、我を助けたまえ』

もう非常にひたむきなんです。

<sup>26</sup>答えて言いたもう『子供のパンをとりて、小いぬ狗に投げ与うるは善からず』

「犬」というのは、ユダヤ人にとつては、忠実な動物というような観念よりもむしろ、けなされるものとして考えられていた。だから、異邦人のことをけなして言っているわけです。「子供のパン」即ち、イスラエルの同族の者にはパンをやるのだが、それを子犬にやるわけにはいかない。

<sup>27</sup>女いう『然り、主よ、小いぬ狗も主人の食卓よりおつる食たべ屑を食くらうなり』

「その通りです、落ちた食屑をいただくので、まともにパンをくださいと言っているわけではない」と。

<sup>28</sup>ここにイエス答えて言いたもう『おんなよ、汝の信仰は大なるかな、願ねがいの  
ごとく汝になれ』娘この時より癒えたり。

非常に劇的なものです。キリストに向かつて、

「もうなんでも、あなたの他に救いはないんだ」

というわけで、何と言われようが、食いついているわけです。それで、キリストが参ったですね。

「願いのごとく汝になれ」

と。

### ●ひたむきの信

キリストが本式に受けとるのは、みんな、自分のことなんかは考えずに、

「自分がどうである、他がどうである」

なんていうことを思わずに、ひたむきに向かつていく魂。これがみんな救われていく。福



音書に出てくるのはみんなそうです。遊女であろうと、取税人であろうと、目の見えない人であろうと、跛者であろうと、聾であろうと。これがみんな、ひたむきにかかってくる。そうすると、キリストはそういう態度を非常に喜ばれる。

ところが、

「自分は道徳家である。自分は宗教家である」

というような、エリート意識をもったような、自己の意識の強そうな、そういった者たちは、これは反ってキリストの敵である。いわゆるパリサイ人であって、

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

とキリストが烈しく言われるのは、そのことです。

実はこの「カナンの女」というのが、キリストが負けたただ一つの例なんです。このカナンの女の信仰というのは、本当にキリストが、

「汝のおおの信仰は大なるかな」

と言われた。

「彼女の信仰が強い」

とか、こういう言葉を何かとり違えないでいただきたい。要するに、

「ひたむきである。100%にキリストを信じかかっている」

ということ。これが「信仰が大なるかな」ということです。

「自分の側がどうである、こうである」

なんていうことは問題ではない。

これが即ち、キリストがたった一回負けた。どこで負けたかというところ、カナンの女に負けた。

「自分はイスラエルの他には遣わされていない」

と言われた。実はキリストは全人類に遣わされた人なんです。けれども、この場合、このイスラエルの救いのことをキリストは念頭に置いていらつしやつたので、その他のことは考えられなかった。特に、イスラエルは非常に神の民として自分たちを誇っている。キリストはその誇りをひっくり返さなくてはいかん。そういった誇り、伝統を誇つたり、自分の宗教心とか道徳を誇っている連中をひっくり返して、神さまの前に本当に平伏ひれふす平伏ひれふの魂にするために、キリストは頑かたくなイスラエル人に遣わされているわけです。

そのイスラエル人が回心すれば、今度は、伝道が異邦人に向かつていく。そのことをはつきりやったのがパウロ。キリストに最も逆らっていたパウロです。

「パリサイ人中のパリサイ人」

というパウロがキリストにひっくり返されて、そして、彼は参ったですね。それで、彼は本当に砕けたる魂になつて、異邦人伝道の大伝道者になつたわけです。

そういうことで、異邦人カナンの女がこのような、ひたむきの信をもっていた。これはむしろ、イスラエル人への戒めでもあるわけです。たった一回、キリストが福音書の中



で負けたのが、カナンの女に負けた。けれども、キリストは負けることによって、本当に相手を救いなきつた。

「汝の信仰大なるかな、汝の願いの如くに汝になれ」

と言つたらば、その瞬間に治つてしまふ。他でもいろいろありますけれども。それは地球の向こう側であろうとも、そんなことは問題ではない。それだけの霊的な現実を今のキリスト者はあまり知らん。

●「精神一到、何事か成らざらん」

この「ひたむきな」ということで、私の母は実は非常にひたむきな女性であった。

「精神一到、何事か成らざらん」

という言葉がある。これは私は母から小学校の時に聞かされた。母は明治2年（1868年）に信州松代に生まれた。あの佐久間象山の出した所です。だから、象山精神というのがやはり何となくある。小さい時に、まだ学校へ行かない前に、漢籍を教わるために漢文の先生の所に出かけていった。先生が門を開く前に行つてなくてはいけない。門の前で立って待っている。昔の教育はそういうものですから。そうすると、先生が門を開いて、幾人か教わつたわけです。そして、板の間に坐らせられて――裸足ですよ、足袋なんかはいてない――論語、孟子を素読する。

これは天野貞祐先生もそのことを書いておられる。昔はそうだった。だから、よく論語の教えだとかをそらんじている。今、私は福音の角度から、儒教の論語や孟子を読むとまたおもしろい。やっぱり、何と言つても、古典は尊敬しなくてはいかん。外国では、ギリシヤ・ラテンの古典の哲学や文学です。

母は、儒教の教育を受けてますから、女性ですけれども、なかなか意志が強い。「精神一到、何事か成らざらん」と。17歳の時に自分は勉強したいと――彼女は女子ばかりの八人姉妹の五番目です――勉強したいというわけで、小さい時からそうやって漢籍を教わっていますから、

「江戸へ出たい」

と願つた。けれども、17歳の女の子を一人で出すわけにいかないというわけで、お許しが出なかつた。そうしたら、遂に夜陰に乗じて、家を出てしまった。松代から信州の小諸までやってきた。そしたら――昔は追いかけるときには二人力の人力車で追いかけるんです、速いから――二人力の人力車で追いかけて来た。

「帰れ」

というわけだ。母は、

「もしあなたがどうしても帰れとおっしゃるなら、私の首を持つていってください」と答えた。それで、参つたね、追手が。



「そんなに、志が堅いなら、行きなさい」と、逆に今度は路銀をもらって、そして、出かけて行った。これは母から直に私が聞いた話です。正にこの「精神一到、何事か成らざらん」です。

### ●兄貴の政美

そして、母は昔のお茶の水女子高等師範で勉強して、女学校の先生になる。国語と数学、どちらもできるんだ。お茶の水の女学校の先生を20年間やってきました。昔は5年だから、四クラス担任をやった。担任の生徒たちがよく、母が失明してから、訪ねてくれました。昔の師弟の関係というのは非常にうるわしかったですね。大体は、公立・官立の学校の師弟、先生と生徒との関係はあまりうるわしくない。しかし、お茶の水は、その点ではよかったですね。私立では非常にうるわしいものがよくありますけれども。

父は、私の5歳の時に亡くなってしまいましたから、私たち兄弟6人――私のすぐ上の兄は割合早く亡くなってしまった――あと5人は、母に育てられた。女教師をして、5人の子どもを育てることは、昔でもそう簡単ではない。なかなか大変でした。貧乏でしたからね。門のある家になんか住んだことがない。いきなり格子戸みたいな家でした。パンにバターを付けるなんてことは滅多になかった。たいてい、お砂糖を付けて食べていた。たまに、肉鍋なんかすると、私はお腹いっぱい食べたなんてことを覚えています。

だから、私の一番上の兄貴は大学生になったときに――昔は、ほとんど大学生はアルバイトなんかしなかつたけれども――私の兄貴はアルバイトして、或る個人教授をしていた。相手は非常に秀才で、教えやすかつたようです。大学の教授にまでなつた人ですけれども。一番上の兄貴の政美です。これは兄弟のうちで最優秀です。私なんかが生きているより、兄貴が生きている方がよかつたくらいです。なにしろ、成績は「全美」ですからね。昔は、「美・良・可」という。きれいだよ、美がそろっているんだから。全科目が美だから。私なんかは、良だの、可だのがあつた。ところが、兄貴は全美だ。だから、高等文官試験も――今の司法官試験か――大学の1年とちよつとやって3年間の勉強をして、パスしてしまつたものな。民法が98点とつたと言つて、試験官がびっくりしてしまつた。

そういう兄貴でしたけれども、その兄貴が27歳で、一高・東大・大蔵省というコースで、非常に英語ができたから――日本語と同じくらいペラペラでしたから――本当はロンドンに行くはずだつた。それが北京に、上役が自分の知っている人と切り替えてしまつた。これが運のつきでした。北京の公使館に行つて、財務官付きになつて、そこで腸チフスに罹つた。それで、母は二番目の兄貴と見舞いに行つた。ところが、遂に、1921年9月22日に仆れてしまつた。

母はそれまで本当に苦勞し、随分無理をしていたものですから、お腹をこわして、パンを食べたりお粥を食べたりしてました。それが過勞と非常な落胆で、心痛と両方が来て、



帰りの黄海の上で失明してしまった。緑内障に罹った。

失明の母が遺骨をかかえて帰ってきた。参ったね、私は。寝られなかった。家をたたんで――武田叔父さんというのがいます、一番下の妹の家庭です――母と私はその家にごやつかいになった。私はちょうど受験準備中だった。兄貴は一高でしたから、一高に入れたかった。正直、自信はあった。一高の受験票をもらってきた。水戸の高等学校と両方を。けれども、一高を受けて私は落ちたら悪いと思って、水戸を受けた。水戸は私は3番で入ったから、一高にも入れたんです。その頃は問題はみんな同じだから。だから、水戸に入っても、私はちつともうれしくない。

そんな心理状態が作用したか何かは知らないが、水戸で今度は、胃腸をこわしてしまった。これは直接には、豚肉にあたつたんだけれども。とにかく、水戸で1年遅くなってしまった。休学した。その休学したときに、多少身体がよくなったときに、内村鑑三先生の大手町の集会に出かけて行つた。兄貴の本を読んで――兄貴は内村先生の本をたくさん持っていますから――非常に私は響いたね、この内村先生の文章（『宗教と現世』）が。それで、内村先生の集会に出かけて行つた。まあ、自分が病気になって、そういったきっかけを作られたということも一つの摂理ですけれどもね。それが私の20歳の時です。それからもうずっと今まで一貫しているわけです、75歳まで。

### ●藤井武先生

この聖書は、私の兄が母のために買った聖書です。

「母上様 1919年9月28日 政美」

と書いてある。それから、母を大手町の集会に数回、兄は連れて行きました。私は今度は救われたから、内村先生の集会に行こうと思つたけれども、兄の遺稿集を内村先生の弟子の藤井武先生が作つてくださった。『基督の復活』という――ゴードーのものを兄は繁忙中も訳したんだね――それを藤井先生が出版してくださった。それで、藤井先生と私は縁ができたものですから、校正なんかしましたものですから、それで、藤井先生の家集会に――12、13人から14、15人です――その家庭集会に出かけて行つて、藤井先生に大学の1年から5年間無欠席でごやつかいになりました。黙示録22章から始まって、黙示録22章で終わつたんだ。

内村鑑三と藤井武。この二人が1930年の、内村鑑三先生は3月に、藤井先生は7月に仆れた。日本の二本柱みたいだ。霊的な精神的な大チャンピオンです。どっちもユニークです。藤井先生というのは内村先生の弟子の中の弟子だ。

「藤井は「わい」」

と言つたそうだが、あのこわい内村先生が。塚本虎二先生は藤井先生の無二の親友です。無二の親友だけれども性格的には西と東のように違う。



藤井先生は「新町学廬<sup>がくろ</sup>」と言って、「歴史的にあとづける聖書神学」——無教会で神学のことに関心をもったのは、藤井先生が最初であった——それから、アウグスティヌスの『告白』、プラトンの『ファイドン』、この三つを月・水・金の——日曜日の他にですよ——晩に開いた。それに私は出かけて行つたから、1週間に4日間です。矢内原先生も来てたよ。アウグスティヌスのときだけは、母を連れて行つた。もちろん、日曜の集会にも連れて行つた。また、母は別な——お友だちがいますね——富永徳磨とかいう人の集会にも行つたり、その人が死んだあとで、中川景輝という方の集会にも行きました。とにかく、失明し、兄を失つてから、母も信仰の世界に入ってくれたわけですね。塚本先生の集会にも、私は母を連れて行きました。この順子と結婚してからも、順子も手を引いてくれました。

### ● 弔い合戦

けれども、母は少し歩くのが大儀になつてきた。それで、1940年9月22日——ちょうど日曜日でしたから——兄の命日に、これを期してここで集会を始めた。それから、ちょうど今年の9月で40周年になるわけです。もともと、一番個人的な動機は、母にここでもつて聖書のお話をしてあげようと。これが個人的な動機なんです。家庭集会です。それがだんだん広がって行つた。

母は88歳で亡くなりました。私は小さいとき、幼稚園や小学校のときのことを想うと、父がいまさんから、母が学校から帰ってくると、私は待ちかねていたようなことを覚えていきます。母は愛もあつたけれども、なかなか義も強い女性でね、さつきから言っているとおり、意志が強いですから、正しいことに対しては非常に厳格でした。そういう意味で、私をぶつたことはないですけども、愛と義の両面の女性でした。

とにかく、失明した時は、母は

「本当は自殺したかった」

と言つた、だいぶ後から。だけれども、僕たちのことを思つて、

「それは思いとどまった」

と言つた。けれども、失明して目が見えないということをも母が不平を言つたのを、私は一遍も聞いたことがない。

「見えない」

とか、

「見える人がうらやましい」

とか。私は全く頭があがらない。本当にそういう意味においては、

「おおよそいって忍び」

という、忍びぬいたですね。それでも、気持は明るいんです。この信仰を持っているからね。大体、なかなか信仰を持てるような母ではないんです。儒教でもって鍛えているからね。



自分でなにかやっつけていこうという。始めはマルタ的な活動的な母であったが、失明してから、マリヤ的なことになったわけです。『曠野の愛』誌の27号に詳しく書いてあるので、いつか読んでください。『随想集』の中に入れます。著作集第六巻『随想集』（1982年12月刊）は母に捧げるつもりです。魂の世界で私の第一恩人は兄ですけれども、私の存在そのものに対する恩人は、何と言っても、母です。この母がいなければ、今日の私はないと言ってもいいくらいです。だから、私の生涯は、母と兄に対する弔い、合戦ということでもあります。

### ●「天なる母よ」

私は母の歌をつくった。これは、讃美歌519番「わがきみイエスよ」の歌調で歌えるんです。これは1月19日の午前一時につくりました。

「天なる母よ」（作詞1980年1月19日）

——母小池みつ子の23周年記念の日に——

- 1 あめ 天なる母よ 汗と涙の  
いくとせ 幾十年をば つしめ 勤勞給へり  
〈おりかえし〉
- 主よ主よ 愛を尽くせし
- 2 天なる母よ ねぎら ねぎらいたまえ  
ほくし 北支の古都に
- 子を失いて 歸途に失明
- 3 天なる母よ 闇の旅路を
- かこつことなく 忍び給へり
- 4 世の母たちよ 子女らの胸に
- 信望愛の 花を咲かせよ
- 5 世の母たちよ 世界に平和
- もたらすものは 愛の力よ
- 6 世の母たちよ うた 讃歌を合唱うたいて  
世界の架せよ

### ●自分を投げ入れる

そういうわけで、私の母の「精神一到、何事か成らざらん」という、このひたむきが今度は、キリストに向かつてのひたむきになる。それがさっきの「カナンの女」の姿です。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」

とは、



「主なる汝の神・キリストを愛する」

とは、自分を投げ入れることです。私はこの「愛する」という言葉は困っていたんだよね。

『神を愛する』と言ったって、なかなかこれはむずかしいなあ」

と。何も、我々が神を愛するなんて、大それたことではないので、

「自分を投げ入れることが愛すること」

なんです。

「あなたでなければ、私はしょうがない、どうにもなりません」

と言って、投げ入れることが本当に愛すること。だから、愛することと信ずることは一つなんです。信愛これまた一如です。

実は、この詩篇の102篇は、悲しみの詩篇ですけれども、私が母を失ったのが土曜日。その翌日の日曜日に、私は集会をここでいたしました。そのときに、詩篇102篇の話をした。そのことは今度の『詩篇珠玉集』（著作集第四巻 1980年1月刊）の中に出てますから。

私は、集会は絶対に休まない。それを戦ってきました。皆さん、

「日曜日の午前はダメなんです」

ということ、なぜはつきりと言わないか。いろんな事情でもって、

「今日はこういう事情でどうしても行かれませんか」

と言うけれども、なぜ、それに負けるか。

「こういうことは日曜の午前でなければどうのこうの」

というような、この世のいろんな習慣がある。けれども、

「何を言うか。自分はキリスト者である。日曜の午前は何がなんでも、集会を守る

んだ」

と言わなくては。それは、<sup>おきて</sup>掟として守るのではない。守らざるを得ないんです。

「キリストの中に私は入らざるを得ない」

と。だから、力が来るんです。だから、不思議なことが起きる。長いこと耳を患っている方が一瞬にして治るではないですか。それは、私を通して力が働くんだから仕方がない。私は何者かでない。私は何者でもないから、働く。

どうぞ、皆さんは――それはある時は、どうしても仕方がないということはありませんよ、ありますけれども――

「どこにおいても、日曜の午前は自分たちは死守する」

と、死をもつて守るというくらゐな気持ちでいてください。

ことに正直、これからの日本はあぶない。どうなるか分からん。そんな時に、いい加減な信仰ではもたないですから。皆さん、本当にこの使徒的信仰の証し人になってくださいよ。もう、時は迫っていますから。今の昭和元禄なんて、こんなことをやっていたら。



## ●「勝利者の墓」

詩人ブライアントの「勝利者の墓」という詩がある。これは或る女性、独りで人生を戦いぬいた女性のことを歌っている。その中にこういう句がある。

「彼女の栄光は此の国土のものではない、

時限の流れにつれて亡び去る栄光ではない。

彼女、碧玉の門に突入したとき、

どんな喜悦がその天つ瞳に輝いたろう！

天の淵は歓びに輝きどんなにどよもし迎えたか、

「天の淵」とは深い大空のこと。

天の花は手もあでやかにどんなに舞い躍ったか！

而も彼、その昔

痛苦と侮蔑と悲哀とを荷なった彼

「彼」とはキリストのこと。

あの強い受難の人は、甘美な聖顔で

御座からこのかわい旅人に微笑んだ。

彼こそは栄光の中、墓から還り、

「死」の剣を奪って鎖につなぎ、これを奴隷とした人である。」（私訳）

キリストのことです。即ち、死も罪も、陰府にもサタンにも打ち勝ったキリストが歓び迎えたろうと。その勝利者は独り静かに耐え忍んで、人生を戦いぬいた独りの女性のことです。それを歌っている。私としては、掛け替えのない母でした。

また、日本の国で大事なものは、日本に限らないけれども、

「女性は歴史をつくる」

という言葉があるが、いい意味においても悪い意味においても、女性の力です。男性の力は表向きだけでも、女性の力は本当の底力だよな、隠れた力です。これが本当は歴史をつくっていく。大体、偉大な人の、善き魂の母というのはみんな魂がいい。だから、女子教育は大事なんだ。私は女学校の校長になればよかった。第二の国民をつくるのは――自分の子であろうと、あるいは独身の女の方であろうと、そんなことは問題ではない――とにかく、その第二の国民をつくるのは、女性の力が非常にあるわけです。

やっぱり何と言っても、子どもにとっては「お母さん」でしょうが。あまり「お父さん」なんて言わない。死ぬ時にも

「お母さん」

と言う。戦場においてもさつと映ってくるのは母の顔だそうだ。それだけ女の方は大事なんです。だから、女の方が魂の上で魂の教育を、家庭教育は魂の教育をしていただかないと。

「偏差値が何だ、どこの学校がどうだ」



なんてやっているような日本では、いつまでたつても始まらない。むしろ、学校なんか解散してしまつて、塾ばかりにしちやつたらいくらいいかな。

問題は、学校においても、社会においても、家庭においても、結局は、父と母であるところの人間なんだな。結局は、魂の問題なんです。全部、魂の問題です。「ひと」です。神霊の止ま<sup>とど</sup>まっているのを「霊止<sup>ひと</sup>」という。

皆さんも、いろいろお母さんに対する想い出があると思います。私の母は、ことに失明の38年間。私自身には考えられないね。この中にも目の見えない方がいらつしやるけれども、私は正直、頭があらん。とにかく、人間というものは、或ることにひたむきになると、えらいことになると思います、どの道。

「一日千年」ということは「一日永遠」ということです。一日が即ち永遠である生き方。どうぞ、皆さん、そういうわけで、私は個人的な母のことを言いましたけれども、何かご参考になれば、ありがたいと思います。

### ●自分を問題にするな

このキリストという驚くべき実在——もう本当にそうです——これが私たちに御霊をもつて臨んでくださるから、行き詰まりを知らん。どうぞ、遠慮なくキリストの中に自分を投げ入れてください。十字架という門が開いているんだから。もう、過去も現在も未来も、自分なんていうものは問題じゃないです、そんなものは。それがどんなやつであろうと、問題じゃない。問題はもう全部、十字架で片づいているんだから。だから、遠慮なく中へ入る。

みんな結局、自分を問題にしているんですよ、自分を。それはいいんですよ、ある意味では、自分を問題にするのも。

#### 「己自身を知れ」

なんていう言葉がある。「己自身を知れ」というのは、ソクラテスに言わせると、ギリシヤ人は知的だから、

「自分は何も分からないということが分かった」

と言った。即ち、無知を知ったんです。今度は、ユダヤ人では、パウロは、

「ああ、我は悩める人なるかな。この死の体<sup>からだ</sup>より救わん者は誰ぞや」

と。悩みの世界です。実存的に、実践的に、道徳的に自分という者はダメだ。どうにもならない。

「善を欲すれども、わがうちに別な法があつて、悪をさせて困る」

と、ローマ書7章でパウロは叫んでいる。

自分は何も知らん。自分は実は何もできない。実行しようと思つても、できない。私もそうでしたよ、昔。今だつて、そうでしょう。実行しようと思つても、三日坊主だよな。



日記なんか書こうと思っても、ちょっと書いているうちに、そのうちにやめてしまったりね。どうしようかというわけです。どこから力がくるのか。

実践的にダメ。無知、無能。無善、ちつとも善くない。とにかく、無い無いづくしなんだ。ところが、誰あらん。イエス・キリストが自分でそう言つてらっしやるんだ。

「私は何もできないよ。私はちつとも善くはないよ。神さまの他に、力もなければ、善いものもありはしないではないか」

と。神の子キリストが自分を何者ともしなかったのに、我々が何者かと思つたら、どういうことになるんですか。だから、

「自分を問題にするな」

と言っているんです。そんなものを、ローソクの火を、太陽の光の前で問題にして何になるかということですよ。

### ●天下一品

だから、自分を何者ともしないで、ただキリストの中に自分を――どんなにガラクタであらうと、頑かたな野郎であつても、自我が強かろうが、何でもいいよ――キリストの中に、十字架の門を通つて――十字架で全部、すつ飛ばされてるんだから――入つていけば、そこから始まるんだ。何か知らんけれども、始まる。もう変わつてしまふ。何か知らんけれども、エネルギーが、智慧が湧いてくる。その人の賜っている才能が無限大の質を持つてくる。量的には無限大ではないですよ。無限無量の質を持つてくるんです、有限なるものが、その人が賜っているいろいろな才能や資質が変質変貌してくる。

禁欲的にそれを棄てていくのではない。投げ棄てると、それが変質変貌して、本当のその人の善き姿が現れてくる。知的な人は、おおいに知識の上でやります。情的な人は、情の上でやります。意志的な人は、意志でやります。全部、それが神のものとして展開が始まる。画一のものをつくるのではない。皆さんはみんな天下一品なんです。天下一品なんだから、その天下一品性がキリストの中に入ると、無限無量の質をもつてくる。本当にそうです。

それだから、私は

「祈り込みなさい」

と言っている。「祈り入れ。祈り入れ。祈り入れ」と。投げ入れることが最大の行為なんです。最も力強い行為です。信即行なんです、これが。それは私だつてたまには、断食して祈つたことでもあるんだから、山の中で。山の中で断食して祈らなければダメだとは言いません。町の中で結構です。とにかく、何か方法ではない。問題は自分を投げ込むこと。それが本当の

「幼子の如く」

ということですよ。

「天国は激しく攻むる者これを奪う」



と言う。さっきの「カナンの女」がそんなだよ。激しく攻めたんだよ、キリストを。

「私はパンくずだつていいですよ」

と言った。参ったんだ、キリストは。

「お前の信仰は本ものだ。願いの如くなれ」

と言ったら、その女の子が治ってしまったんだよな、瞬間に。本当ですよ、これは。

「聖書にこんなことが書いてあるが、これは本当だろうか？」

なんて言つて読んでいるから、いつまでたつても始まらない。聖書はまだ伝えきれなくて、呻き叫んでいるんだよ。聖書はそういう次元ですから、間違えないでもらいたい。

それを「聖書研究会」なんてやつて、もったいぶっているから、いつまでたつても始まらない。どうも、私は口が悪くなつて困るよ。口が悪いと言つたつてね、あのキルケゴールだの、ルターなんてのはもつと口が悪いよ。キリストだつて、

「かの狐に言え」

なんて言っている。

私は愛すればこそ、時々激しいことを言うんです。

「なぜ、日曜は来ませんか」

と。私は或る人のために本当に気の毒だなと思つている。ダメです、そういうことでは。

「せ為んかた尽くれども希望のぞみを失わず。倒たふされるれども止とどまらず。」

と。皆さん、いいですか。このキリストに在る時ほど強いことはないんですから。

「我弱き時に強し」

とパウロが言つたとおりです。無力となつた時に無限力になる。

そういうことで、今日は、母も天界で喜んでくれているでしょう。私は兄弟の中で一番の弱虫なんです。弱虫で泣き虫で、それがこういうことになつてしまった。私の妹の方がよっぽど強かつた。まあ、お話がお話になつたか知りませんが、そういうことでございます。

女の方は、存在に非常に深い使命がありますからね、絶対に負けてはいかんですよ。本当は、目に見えないけれども、

「本当の歴史をつくつていっているのは私たちである」

というくらいの自信をもってください。

大体、天国に行く女の人はたくさんいるけれども、男は

「ちよつと待てー!」

と言われる。まず煉獄から、ヘタすると地獄を通つて行く。ダンテなんかは地獄から通つたね。地獄、煉獄、天国と。まあ、しかし、ダンテの『神曲』はすごい。私はイタリヤ語をやれば、ダンテの研究者になつたと思うけれども。大変なもんです、ダンテというやつは。